

## 1

## 日露戦争期の広島予備病院における活動

—日赤救護班の看護活動を中心として—

岡本 裕子<sup>1)</sup>, 坂村 八恵<sup>1)</sup>, 隅田 寛<sup>2)</sup>, 千田 武志<sup>3)</sup><sup>1)</sup>広島国際大学看護学部看護学科, <sup>2)</sup>広島国際大学保健医療学部診療放射線学科<sup>3)</sup>広島国際大学医療福祉学部医療経営学科

これまでわれわれは、日清戦争および北清事変期の広島における医療と看護について研究をつづけてきた。今回は、こうした研究の成果をもとに日露戦争期の医療と看護、とくに日赤救護班が最大の医療施設であった広島予備病院においてどのような看護活動をしたかについて明らかにしたい。報告に際しては、まず日露戦争期の広島の役割を概観し、次に広島予備病院等の医療、最後に日赤救護班の派遣と活動状況を取り上げる。具体的には以下の通りである。

1. 日露戦争と広島
2. 広島予備病院等の医療
3. 日赤救護班の派遣
4. 日赤救護班の活動と評価

以上のことを分析した結果、日清戦争、北清事変に比較して、次のような特徴を有していることが判明した。

まず医療に関しては、広島予備病院には激戦を反映して多くの重傷病者が入院したこと、衛生知識の普及や臨時似島陸軍検疫所の早期稼動により伝染病、特に致死率の高いコレラ感染者を減少させたこと、病理分析、レントゲンの活用、手術法の改良などにおいて医療の発達がみられた。ただし海軍において日清戦争以前にはほぼ解決済みであった脚気については、病理検査において脚気菌の解明に最も力を入れるなど、この時期においても解決の糸口が見出せなかった。

一方、看護についてみると、日露戦争において日赤は18班・468名の救護員を広島予備病院へ派遣し5万3818名（全体の24パーセント）と、これまでの戦争よりはるかに多くの傷病兵の救護にあたった。この救護活動は困難を極めたが、全国から動員された日赤の看護婦は、「博愛慈善」と「報国恤兵」の精神で自らに課せられた任務を遂行した。また技術的にも、病院側の協力もあり、看護法や食事の改善、手術助手としての技量の習得、さらにアメリカから派遣されたマギー夫人以下10名の看護婦との交流を通じて看護婦の雑用からの解放など、少なからぬ向上を果たした。

こうした看護婦に対し広島予備病院は、手術助手として女性のほうが優れているなど、軍事医療に欠かすことのできない存在として高い評価を与えた。このことは国への奉公や皇室への敬愛、医師や軍人に従順で自己犠牲を厭わず看護にあたる傾向の強いといわれる日赤看護婦像がこのとき確立され、日本の看護婦のあるべき姿として大きな影響をもつようになったといえよう。